

## 日韓発掘交流に参加して

2016年10月10日から12月2日まで、日韓発掘交流事業により、韓国の国立慶州文化財研究所に滞在し、発掘調査に参加しました。奈良文化財研究所と慶州文化財研究所は、2005年から双方の研究員が互いの研究所に約2ヶ月間滞在し、実際の調査に参加するという交流を継続的におこなってきました。

私は今回、新羅(三国時代～統一新羅時代)の王宮遺跡として知られる月城の発掘調査と、5世紀の新羅の墓域である、チョクセム古墳群の分布調査に参加しました。月城では、<sup>ヘジヤ</sup>垓子と呼ばれる濠状遺構の調査をおこないました。垓子は5つの単位に区分されていますが、2015年から1～3号を発掘しています。一つの垓子の規模は、長さ100m以上、幅は最大40mにも達する巨大なものです。ここの分層作業を担当しました。また、チョクセム古墳群では、古墳の構築方法を知るための断面調査に携わりました。

調査では、規模の巨大さや遺構密度の高さゆえに土層の理解が難しく、大いに悩まされました。そのような中で、韓国の研究者と拙い韓国語で意思疎通をはかり、時には絵をスケッチブックや地面に描きながら、遺構の理解や調査の方法をめぐって議論できたことは貴重な経験でしたし、何より彼らが私の拙い会話能力を気にせずに接してくれたことで、より一層刺激的な調査になりました。

滞在中、慶州文化財研究所の研究員の皆さんには、公私ともに助けていただきました。おかげで資料調査では韓国中を回ることができ、夜にはお酒を酌み交わして他愛もない会話で打ち解けあうことができました。こうしたことができたのも、これまで双方の先輩方が培ってきた絆があったからこそだと感じています。今後も、両研究所の交流が末永く続くことを望みます。

(都城発掘調査部 芝 康次郎)



月城垓子で分層する筆者

## 古代官衙・集落研究会研究集会の開催

2016年12月9・10日の2日間にわたって、平城宮跡資料館講堂にて古代官衙・集落研究会の研究集会をおこないました。1997年より始まった同研究会も、今回は記念すべき第20回という節目を迎えることとなり、「郡庁域の空間構成」という総合的なテーマを設定しました。

これまで、郡庁に関しては、コの字型や品字型等、複数の建物配置の類型化がなされており、古代官衙・集落研究会においても、2009年に門、2011年に四面廂建物、2013年に長舎と継続的に地方官衙の諸建物の検討をおこなってきました。こうした経緯から、郡庁を個別の建物や建物配置だけではなく、総合的に捉えてみようというモチベーションで企画しました。

当日は松村所長の挨拶の後、考古学の5名の方々から各地域における郡庁の発掘状況・空間構成の報告と、建築史学・文献史学の各分野からそれぞれ、周辺環境をからめた郡庁域の空間構成や郡庁の建物の特徴について報告がありました。2日目の午後には、坂井秀弥教授(奈良大学)を司会に迎えて、討論をおこないました。郡庁の空間構成の特徴を構成する、周囲から区画された広場と、中心的な建物という二つの要素について、その意義や利用法、儀礼との関わり、時期的な変遷等、多岐にわたる有意義な議論が交わされました。そして、報告・討議を経て、郡庁には周辺の国庁・古墳・集落等、地域社会の背景との関連性を考えていく必要があるという新たな課題も見えてきました。

2日間で、計138名の方々にご参加いただき、会場を含めた熱気ある議論が交わされ、研究集会は盛会となりました。

(都城発掘調査部 海野聰)



多数の来場者に湧く講堂